

地域の学校で学びたい！ ～特別支援学級担任に求められること～

数年前、私が勤めていた小学校に、重度の知的障害と肢体不自由を併せ持つAさんと保護者の方が入学を希望して教育相談に来られた。その学校には肢体不自由学級がなく、Aさんは知的障害学級に在籍する子どもたちとも大きくペースが異なっていたので、すぐにはAさんがうちの学校で学ぶ姿が想像できなかった。けれども、Aさんの保護者は、特別支援学校ではなく地域の小学校への入学を強く希望されたので、学校も肢体不自由学級を新設し、Aさんを迎えることとなった。2012年に出された中央教育審議会初等中等教育分科会による「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」や2013年の学校教育法施行令改正を受けて、重度・重複障害児の学びの場は広がってきている。「地域の学校で学びたい」という本人や保護者の思いに応えられるよう、特別支援学級担任に求められることは何であろうか。

中島・石倉（2022）は、小学校特別支援学級に在籍する重度・重複障害児の学びを支える体制の構築プロセスを次のように述べている。担任は、まず《①障害の重さに直面》する。そして、実践を通して《②自分なりの子どもの捉え》を深めていく過程で、《③子どもの学びを支えるのが困難な状態》から《④子どもの学びを支える状態に向かわせる心情・認識》が生まれる。そのうえで、《⑤子どもの学びを支える状態に向かうための取組》を進めることで、体制にも変化が生じ、《⑥学びを支える状態》が構築されていく。このプロセスを参考に、自分の経験をふまえながら担任に求められることを考えたい。

《①障害の重さに直面》する段階では、必要な施設設備は何であるか、教育課程はどうするのか、意思疎通をどうやって図るとよいのか、など担任には様々な戸惑いや疑問があると思う。それらに対応するには、保護者との面談や保育園等の訪問など入学前からの情報収集が欠かせない。子どものできることや好きなこと、家庭や保育園等で取り組んでいることなど保護者や園からの情報は、入学前の施設や備品等の準備、子どもとのコミュニケーション、授業づくりなど充実した学校生活を送る上で、参考になることがたくさんある。また、保育園の様子を実際に見学することも、園での具体的な支援方法や子どもの様子が分かって学校生活にもすぐに生かしやすい。私は、給食時の様子やトイレ支援の仕方などを実際に見学させてもらったことによって、入学前に管理職や他の職員たちと相談しながら必要な設備や備品を整えておくことができた。また、保護者と合理的配慮の提供について話し合ったり、支援体制について管理職やコーディネーター等と検討したりしておくことも必要である。

《②自分なりの子どもの捉え》を深めていく段階では、子どもと関わる中で、その子が好きなことや持っている力、その子にとって必要なことなどが次第に見えてくる。しかし、それが独りよがりなものとならないように、子どもの特性を正しく理解したり、より効果的な支援方法を身に付けたりするための研修への参加や関係機関との連携も必要である。私の場合は、コロナ禍であったため学校や施設間の出入りができず、電話だけのやりとりとなったが、普段関わっている理学療法士や言語聴覚士等の専門家の方々から聞いたことは、Aさんへの支援に大変参考になることばかりだった。特別支援学校のセンター的機能を活用して、巡回相談に来てもらうという方法もあるだろう。教師が自ら学ぼうとする姿勢は保護者との信頼関係を築くことにもつながる。コロナの感染状況が少し落ち着いた頃に、私はAさんの通うリハビリの

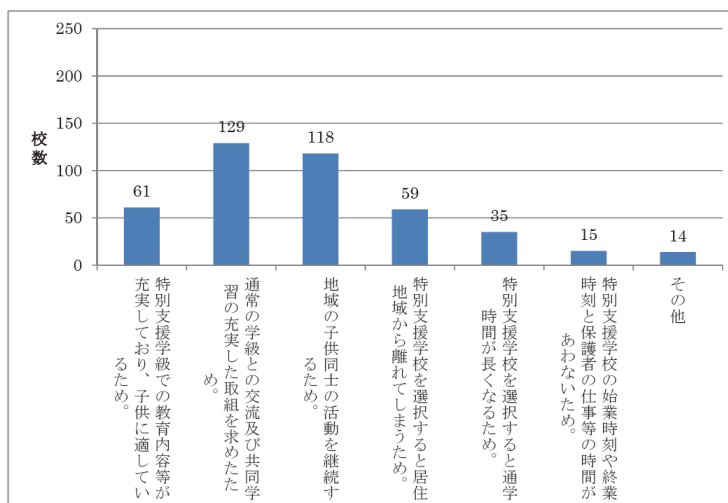


様子を見に伺ったことがある。学校で私と意思疎通がどれくらい図れているか明確ではなかったが、その日はAさんがリハビリにとっても張り切っている様子だと保護者や理学療法士から聞き、終わってからすぐにずり這いで私のところに自分から寄ってきてくれた。「担任だと認識してくれている!」、私の教員生活の中で最も嬉しかった瞬間の一つである。

《③子どもの学びを支えるのが困難な状態》を引き起こす原因として、中島・石倉は「担任一人に任せられている」「小学校は通常学級が基準の枠組みで動いている」といったことを挙げている。国立特別支援教育総合研究所（2021）の調査によると、特別支援学校は培われた知識や技術の継承、OJT形式の研修で教職員の専門性向上を図っている状況があるのに対して、特別支援学級は重複障害児を担当した経験が少なく、校内にOJT形式で伝達することが難しい状況にあることが報告されている。特別支援学級では、専門的な知識や技術について相談したり、情報交換をしたりする場が少ないため、担任一人で支援を考えたり実行したりしなければならない状況が多い。担任まかせにならないようにするには、まず子どものことを周囲に知ってもらう必要がある。私は、毎朝Aさんとバギーで校舎内を回り、職員室、校長室、保健室、事務室へ立ち寄ることを日課としていた。すると、いろんな先生たちから毎日顔を見て声をかけてもらえ、ちょっとした変化に気付いてもらえることもある。また、職員会議等で子どもの特性や支援方法について全職員で共通理解を図ったり、学校行事の前には配慮が必要な子どもの参加の仕方を伝えたりする機会を設けた。そうして、子どもの様子を知ってもらっていると、いざ協力を要請したいときに相談がしやすくなる。



《⑤学びが支えられている状態に向かうための取組》には、職員の協力、環境面の調整とともに、特別支援学級において特に大切なのが、子ども同士をつなぐことだろう。国立特別支援教育総合研究所（2021）の調査によると、重複障害のある子どもの保護者が小・中学校等の特別支援学級を選択した理由として最も多かったのが、「通常の学級との交流及び共同学習」で、次いで「地域の子供も同士の活動の継続」であった。やはり、子ども同士のつながりは重視したい。私は、交流学級の子どもたちにAさんのことを知ってもらうように、好きなことや頑張っていることを紹介したり、休み時間は特別支援学級で一緒に遊ぼうと声をかけたりした。また、保護者や交流学級担任と相談しながら、Aさんの交流学級の活動への参加の仕方考えた。45分の授業に全て参加することは難しかったので、Aさんの状態を見ながら、途中から授業に参加したり途中で特別支援学級に移動したりした。交流学級担任もAさんのことをよく理解していたので、臨機応変に対応してくれて大変有り難かった。学級の子どもたちは、音楽や生活科などの時間にはAさんを取り囲んで声をかけ



保護者が小・中学校等の特別支援学級を選択した理由 n=205

引用元：国立特別支援教育総合研究所（2021）重複障害のある子供の教育に関する調査報告書

たり、体育の時間に隣で A さんが別メニューを行っているのを応援したりと温かく自然に関わっていた。交流学級にいと、いつも誰かが A さんのことを気にかけてくれた。特別支援学級の子どもにとっても通常の学級の子どもにとっても、お互いに学びのある交流及び共同学習にしたい。

このように見てくると、私が考える重度・重複障害児を担任する特別支援学級担任に求められることは、一人で抱え込まないように担任が周囲の職員や専門機関、保護者等とつながること、子ども同士をつなぎ双方に学びのある交流及び共同学習を行っていくこと、そして専門性を身に付けるために学び続けることにまとめられる。校内で継承される専門性や整った環境面では特別支援学校に及ばないかもしれないが、子ども本人や保護者が「特別支援学級でよかった」と思ってもらえるように特別支援学級担任ができることはいろいろある。

引用文献

中島優子・石倉健二（2022）重度・重複障害児の学びを支える体制についての検討—小学校特別支援学級に焦点をあてて—。兵庫教育大学学校教育学研究，35，101-111。

小澤至賢（2021）令和元年度～2年度研究班（重複班）活動による調査 重複障害のある子供の教育に関する調査報告書。独立行政法人国立特別支援教育総合研究所。